

イスラーム世界における 吟遊詩人・音楽集団の教材化

厚木高校 大久保 敏 朗

一. はじめに

イスラーム世界に関する歴史を世界史の授業で教える時に考えることは、どのようなものを切り口にしていけば、生徒の興味・関心を向けることができるかということだ。ごく普通に考えて、世界史の授業でやることといえば、イスラーム教の成立とその教義や宗派の概要を説明し、王朝交替の歴史を教えるぐらいで終わりではないだろうか。あとは文化をどこまで詳しくやるか、イスラーム商人がつくりあげた交易ネットワークをどこまで触れるかにとどまるだろう。どちらにしても、切り口として工夫できるのはその中でどれだけあるだろうか。その中で私がとりあげたいのはイスラーム世界における吟遊詩人、もっと広く言えば音楽集団の活動である。ここでは、イスラーム世界における吟遊詩人・音楽集団の活動を歴史を概観する中でおおまかにとらえ、視聴覚教材を使った授業がどのような形で展開できるかを検討したい。

二. 歴史からみたイスラーム世界の吟遊詩人・音楽集団の活動

○イスラームにおける音楽との関係

イスラームでは世俗的音楽の是非について、イスラーム法の解釈の中で、悪いものととらえている風潮がある。「コーラン」で具体的に触れているところは少ないが、次の箇所にかろうじてみられ

る。「次に詩人たち。あれ、迷わされた人間どもがぞろぞろ後について行く。汝(ムハンマド)見たことはないか、彼らが谷間のあたりをさまよい歩いて、自分では決してやりもせぬことをやたらに口走っているところを。」(二六章、二二四〜二二六節、井筒俊彦訳) という箇所や、「人々の中には、たわいもない馬鹿話を買い込んで、それで(他人)をアッラーの道から誘いだそうとしているものがある。なにも知りもしないくせに。(アッラーの道)を頭からばかにしてかかっている。こういう者どもは、いまに必ずひどい罰を受けて、面目をつぶすことになる。」(三二章、五節)と伝説などの類の詩を歌いさまよい歩く吟遊詩人(シャイール)への非難が述べられている。シャイールは「巫者的な性格を持ち、神がかりになって呪言を唱えうた」(『アジア音楽史』より引用)広い意味で音楽家である。イスラーム以前の諸部族の長や長老の中にみられたシャイールの才能を持った人物たちの呪術的行為そのものがムハンマドによつて非難されたのであつて、詩や歌唱そのものではないのではないかと考えられる。とはいえ「コーラン」の文体は「ムハンマドが非難したシャイールの歌と無関係ではな」い。「むしろその特徴を採りこんで、民衆の耳に訴えよう」(同)としたのが、ムハンマドの意図であつたとも考えられる。イスラーム伝承のハディースの二大祭の書にも、歌に関する箇所が出てくる。祭りの日にアイーシャの家に二人の少女が入つてきて、彼女らがイスラーム以前の戦いに関する歌を楽器の伴奏にあわせ歌っていた。そこにムハンマドが入つて来て、顔を背けてベットに横たわっている。次に入つて来たアブー・バクルは、「何で預言者の傍らで悪魔の歌を」と言つて、アイーシャを叱る。このハディースのアブー・バクルの言葉の中に、

非イスラーム的な世俗的な歌曲に対する印象があまり良くないものと感じることが出来る。またムハンマド時代は『彼を攻撃したり、風刺したりする詩をつくった人間を処分した』(『イスラム世界の二千年 文明の十字路中東全史』より引用)のであり、そればかりか「その詩をうたったり、吟唱したりした歌い手まで殺してしまったこともある」(同)ということを見ると、詩を伴う歌については(その内容にもよるが)否定的な見方をする場合があったことが理解できる。

○イスラーム世界における吟遊詩人・音楽集団の登場

歴史を遡っていくと、イスラーム世界において音楽家たちの活動はカリフの宮廷生活の中で、活発になっていく。音楽家たちの活動が活発になるのは、ウマイヤ朝時代からである。吟遊詩人としてアラビアを放浪してのち、首都に定住するようになったメデイナ生まれのマアバドもその一人である。メッカとメデイナは歌謡の養成と音楽の演奏する場所となり、多くの音楽家たちを首都ダマスカスに送り込んだ。イスラーム法学者たちはこのような娯楽を享樂であると見、ハディースを引用して反対しようとしたが、効果はあがらなかった。第二代カリフのヤジード一世は宮廷の祝宴に歌の演奏を求めた。ワリード二世はマアバドなどを含む大勢の演奏家や歌手を宮廷に招いている。また、アッバース朝の宮廷でも音楽は保護され、ハールーン・アッラシードの時には、イブラーヒーム・アル・モウスイリー(七四二〜八〇四)やイブン・ジャミなどが歌を競い合っている。これら音楽家に対し、アッラシードは多額の褒美を与えている。カリフの家系の中でも、ハールーンの弟のイブラーヒーム・イブン・アル・マフダイが音楽家兼歌手として活躍し、アル・ワシ

ク(在位八四二〜八四七)というカリフもリユートに熟達し多くの作曲をした。その後に出たアル・ムンタシル(在位八六一〜八六二)やアル・ムウタズ(在位八六六〜八六九)やアル・ムウタミド(在位八七〇〜八九二)も音楽の才能を発揮している。一方、イベリア半島ではズィルヤーブ(八六〇年頃没、本名アブル・ハサン・アリ・イブン・ナーフィー)がバクダードの音楽をイベリア半島に伝えている。後ウマイヤ朝の君主アブド・アル・ラハマーン二世(在位八二一〜五二)に迎えられ、宮廷で活躍をした。またアッバース朝のカリフでアル・ムウタミド(在位一〇六八〜一〇九一)が詩人としてばかりでなく、歌手として、リユート奏者として活躍したことが事実として残っている。都セビリアは楽器の製造で有名で、吟遊詩人たちの活動も活発であった。これらが南フランスの吟遊詩人トゥルバドゥールに与えた影響は無視できない。しかしこの時代の音楽を現在に伝えるものは少ない。なぜならオスマン帝国支配の時代を経てトルコの音楽要素などが加えられ変質しているからである。それでも、モロッコではヌーバ(順番を意味する)という組曲形式の音楽があり、後ウマイヤ朝時代につくられた様式と演奏をかなり保ち、当時のイスラーム音楽の雰囲気現代に伝えている。

○スーフィーの活動と音楽集団の広がり

九〜一二世紀にかけて活躍したスーフィーによってイスラーム世界の周辺地域にもイスラーム圏が拡大し、宗教は民衆に浸透していった。それとともに聖者の墓廟に参詣するような聖者信仰も活発になり、広がっていった。また、スーフィーの活動はルーミーに代表されるような音楽を伴う新興教団を生み出すきっかけともなり、音楽集団の活動を活発化させていった。このスーフィーにみられる音楽

は、宗教的な要素を持ったものが多く、関連する歌も宗教色が強い。

三、さまざまな地域にみられる吟遊詩人・音楽集団とその教材化

○カッワーリーとベンガルのパウルの音楽とその教材化

カッワーリーはパキスタンで活躍し、スーフイー派の中のチシュティー教団に属し、歌や踊りを通して人と神との合一をはかろうとする音楽集団である。カッワールとは僧の意味で、ハルモニウムを弾きながら歌う主唱者を中心に副唱者が手拍子や楽器を伴奏にアッラーやムハンマドや聖者を称える宗教的な内容を歌う。太鼓はズイクルに通じるような単調なリズムを刻み続ける。このカッワーリーに関連の深いチシュティー教団（開祖ムイーヌッディーン・チシュティー）は、一二世紀ころにアフガニスタンに登場し、活動の拠点をインドに移し、南アジア最大のスーフイー教団として活躍するようになった。その派の聖者の一人であるサリーム・チシュティーにムガル帝国第三代皇帝アクバルは帰依しており、聖者を信奉するあまり遷都までもおこなった。また、宮廷ではターンセンという音楽家が活躍していた。彼はヒンドゥー教徒で、スーフイー教団の聖者たちとどこまで関わりがあったかどうかは不明である。しかし、彼の名前につけられる「ミヤーン」という称号は、スーフイーの聖者や詩人と親交があった人々につけられるため、両者の関係は全くなかったとはいえない。一方、ヒンドゥー教の側で、北インドの中世神秘主義思想の主唱者となったのは、ラーマナーンド（一三七〇〜一四四〇）で、弟子にムスリム出身のカビールやダードゥーがい

る。次の一文はカビールのものである。「おお神よ、アッラーにせよ、ラーマにせよ、私は、その名によつ

て生きている。」「宗教の違いは、単なる神を呼ぶ名前の違いにすぎない。誰でも同じ神に祈っているのである。」（『ヒンドゥー教』インド三〇〇〇年の生き方・考え方』一五一頁より引用）

この中にはイスラームのスーフイズムとヒンドゥー教のバクティの融合をみることができる。彼の思想は、のちのシク教の開祖であるナーナクに影響を与えた。カビールの弟子のダードゥーは多くの宗派を統一することを理想とし、儀礼または正統的慣行をなくし、神に祈ることができるよう「ブラフマ・サムプラダヤー」という団体をつくった。彼の自由な考え方は、ムガル帝国のアクバル帝の関心をひいた。アクバル帝はダードゥーと四〇日近い間、宗教に関する討論を行い、彼の思想の影響も受けたと考えられている。

このようにみていくと、イスラーム教のスーフイーが北インドで活躍し、南インドのバクティ思想との融合をみせるようになったのは、アクバル帝の時代の宗教寛容策と融和策が大きく関係しているであろう。また、彼自身がディーネ・イラーヒーという新しい宗教を考えようとしたように、アクバル帝自身が様々な宗教家との討論を通して、それぞれの思想に影響を受けたことも確かである。また、スーフイーの活動に影響を受け、バクティ思想との融合をはかったヒンドゥー教徒たちの活動がのちのシク教の成立に大きな影響を与えたことも確かである。このことから、授業ではインド文化とイスラーム文化の融合の例として、スーフイーの活動がインドに与えた影響を考える際に、導入として使ってみるのもよいだろう。また、アクバル帝の宗教融和策を説明する際に、またはスーフイーの聖者とアクバル帝の関係について触れる際にカッワーリーの音楽を聴かせて、動機づけとして使うのもよいだろう。

インドにおいては、もう一つベンガル地方にみられる音楽集団がある。パウルトよばれる彼らは、一弦琴のゴピジャントラなどを手にして歌う。歌には宗教的なものが多い。パウルがいつ頃から登場したのかを裏付ける歴史的事実はほとんどない。なぜなら彼らはインド社会の最下層の人々であり、文字としての記録を残していないからである。またサハジ（自然・単純の意味）な生き方を理想とする彼らにとって、自分の生き方を歴史に残す必要はないからである。パウルとは「向こう見ず」を意味し、彼らはあらゆる伝統的束縛から独立し、カーストなどの階級を認めない。ナハリリ・パウルの詩の中には次のような一文がある。

「兄弟よ、こんなわけで、私は、向こう見ずなパウルになった。／私は、どんな主人にも従わないし、同じように、いかなる命令にも、聖典にも、習慣にも従わない。／もはや、人間のつくった差別（カースト）は、私を縛ることはできない。私は、全身から湧きだした愛の歓喜に満たされている。」（同一六一頁より）また、パウルの問いかけの中には、ヒンドゥー教の寺院やイスラーム教のモスクなどの宗教的な施設を否定する態度がみられる。

「われかれに、このほかに寺院が必要だろうか。このからだこそ、われわれの神が住みたもう寺院ではないか」（同一六二頁より）さらにパウルは巡礼にも反対している。

「わが心よ、私は決してメツカやメデイナへは詣でない。なぜなら、見よ。私はずっと『わが友』のかたわらに住んでいるではないか。彼を知ることなく、彼から離れて住めば、私は気が狂うだろう。」（同一六五頁より）

このようにパウルの詩には、宗教的権威や伝統を認めない自由な

生き方がみられる。彼らはヒンドゥー教かイスラーム教のどちらかに属しているものの、社会的あるいは宗教的因習のようなものに支配されることを拒絶している。そして、その一方で南インドから生まれたバクティ思想とイスラーム世界から入ってきたスーフィーの思想がここで融合している。バクティ思想にもある神と人の合一をはかろうとする内容がみられるのである。授業では、イスラーム文化とインド文化の融合がどのような歴史的過程を経て進んでいったかを考えさせる授業の中で、これらの詩や音楽を導入として使うことはできるであろう。

○アーシユクとグズラーリの音楽とその教材化

アーシユクはアゼルバイジャンやトルコにみられる吟遊詩人で、一六世紀アゼルバイジャン出身のイスマイルがサファヴィー朝を建てたころからアーシユクの活動が活発になったとされる。彼らはチョーグル（サズ）という撥弦楽器を片手に民衆が集まる場所ですぐ即興の詩を歌う。アーシユクはトルコではオザンとよばれる。厳密に言うとは過去においてアーシユクとオザンは別のものをさす言葉であったが、現在は混同して使われて、同じものを意味するものになっている。トルコの場合、彼らが歌う詩の内容は大きく二つに分けることができる。一つはある英雄の物語を歌ったもので、もう一つは恋物語で、吟遊詩人の生涯と個人的な愛に関する歌である。小柴氏はその一例として、一七世紀に活躍したエムラーを主人公とした「エルヂシユのエムラーとセルヴィハンの恋物語」というアーシユクの息子エムラーとセルヴィハンの恋物語をとりあげている。その物語は、身分の違う二人の物語であり、これは南仏のトルバドゥールの詩と類似した点がある。このようなイスラームの吟遊詩人の詩

と音楽が南仏のトルバドゥールに影響を及ぼしたということは江波戸氏が指摘している。また、流入のルートとしてイベリア半島を経由したものと、バルカンを含むヨーロッパから経由したルートをあげている。どこまで影響を及ぼしたかについては簡単に結論づけられないが、南仏トルバドゥールの代表的な人物ベルナルド・ヴァンタドールが作った領主の妻に対するかなわぬ恋の物語は、このアーシユクの詩の身分を超えた恋物語という点では類似したところがある。また、エムラーの物語に出てくる歌合戦はドイツ中世のマイスタージンガーの歌合戦を想起させる。

このようなアーシユクの音楽を授業でとりあげるとすると、イスラーム文化がヨーロッパ中世文化に与えた影響を考える学習の中で、イメージづくりをさせるための導入として活用することが考えられる。もちろん、その際には楽器の伝播について触れ、イスラーム世界の楽器がヨーロッパ中世の楽器にどのような影響を与えたかを考えさせるといい。リュートという撥弦楽器の起源がウードであること、ヴァイオリンなどの擦弦楽器の起源がラバープなどにあることなどを理解させるとよいだろう。

一方、アーシユクの影響は、バルカンにみられる吟遊詩人にも影響を与えている。一例をあげるとユーゴスラヴィア（特にモンテネグロ）のグスラーリである。グスラーリはグスレという擦弦楽器を手に歌う吟遊詩人である。彼らは一五世紀ころから支配者であるトルコに対する抵抗の叙事詩を歌ってきた。楽器の影響とともに英雄物語をテーマとする点からもアーシユクの影響をみることができ。詩の中には歴史的事実とは違うケースもみられるので、授業で取り扱う場合には注意が必要である。例えば、マルコックラリエヴツ

チという歴史上の人物が英雄として取り上げられているが、彼はトルコの家臣となり、一三九四年トルコ側に立って戦い、戦死している。しかし伝説では、一三八九年のコソヴォの戦いの最中に敵陣に入り、ムラト一世を暗殺したことになっている。確かにムラト一世はあるセルビア人に切りつけられ、その傷がもとで亡くなったのは事実だが、彼らの反トルコの英雄としてマルコックラリエヴツの物語が伝えられているのは史実と反している。このように民衆の中の歴史的英雄を取り上げて歌う吟遊詩人の伝統は第二次世界大戦のアルバニアの音楽にも引継がれている。この曲はグズラールによるものではないが、授業でバルチザンの歴史を伝える一例としてコルチエ州に伝えられている歌を取り上げ、導入とするのもよいだろう。コルチエ州は第二次世界大戦中、バルチザン闘争の中心地であり、この歌では、戦いに参加した三人の英雄たちの死が歌われている。

○アフリカのグナワとグリオの音楽とその教材化

グナワとよばれるモロッコの音楽集団はスーフイーの影響を受けている。導師のかきならすガンブリという三弦の楽器にあわせ金属のカスタネットであるクラケープを鳴らし、トベルとよばれる太鼓を叩いて歌う。このような演奏を続け、踊ることでトランス状態に陥っていく。元は奴隷の身分であったが、イスラームに改宗した彼らが歌う歌の内容には神や聖人を讃えるものが多い。また彼らは、治療行為もおこない、音楽を通してイスラーム教の拡大に寄与した。したがって、一二世紀以降特に活発となるスーフイーの活動とイスラーム世界の拡大という授業の導入として活用することができる。

グリオは西アフリカにみられる吟遊詩人・音楽集団で、撥弦楽器のコラなどの楽器を片手に弾き語りをする。現在グリオは、ガンビ

ア、セネガル、マリ、ギニアに多く見られる。彼らが歴史上に登場するのは、一三世紀のマリ王国の成立あたりからである。彼らの姓で多いのはクヤテとかジャバテとかコンテやシソコ（スソ）であるが、これらの姓はマリ王国成立時に出てくる王家に仕えたグリオの姓に多く由来する。彼らは狩人や鍛冶屋と同じ世襲集団で、歴史と音楽を代々伝えてきた。グリオには大きく分けると中世ヨーロッパのトルバドゥールのような吟遊詩人と、ジョングールのような音楽集団に該当する二つのタイプがみられる。前者は、彼らの中には王家に抱えられ、王の業績を歌で称えるだけでなく、王の言葉を民衆に伝え、他国との折衝の時に遣わされる役目をする。そして後者としては、親方の下で十人程度の集団を作り、近隣の家から村へ祭りの時に訪れ報酬を受ける放浪のグリオである。彼らが使う代表的楽器のコラはマリ王国成立時にはなく、一八世紀あたりから使われるようになったと考えられている。他にも太鼓やバラフォンなどを使うこともある。グリオの歌う内容の多くは歴史上の英雄を称えるものである。他には教訓的な歌やパトロンへの褒め歌や時の為政者を称える歌などが多い。宗教的な内容のものは少ない。これらはアフリカ史を学習する授業の中で、歴史上の人物（マリ王国の建国者のスンジャータ王など）をとりあげる際の導入として効果的に使うことができるだろう。

四 最後に

ヨーロッパ史の学習では、音楽を使った授業について、数多くのものが考えられる。したがって、音楽を効果的に使い、その時代のイメージや詩を用いてその時代の人々の考えを理解させたりす

ることができる。それは楽譜の存在により、音楽の再現が可能なのが幸いしている。しかし他の地域では民族音楽という形で後世に伝えられ、残されているが、歴史との関連づけということではなかなか難しい点があり、歴史の授業としては使いづらいという点がある。生徒にとつてわかりにくいイスラム世界の歴史学習の中で、場合によって効果的に活用できるのではないか。「何だろうこの音楽は？」と思わせるだけで十分である。授業の中での一つの切り口として、導入として活用するだけでも生徒の歴史に対する興味・関心を持たせる動機づけになるのではないだろうか。

〈参考文献〉

- 柘植元一 他編『アジア音楽史』、音楽之友社、一九九六
 クシテイ・モーハン・セーン（中川正生訳）『ヒンドゥー教』
 インド三〇〇〇年の生き方・考え方』、講談社、一九九九
 江波戸昭『世界の音 民族の音』、青土社、一九九二
 K. ヒッテイ（岩永博訳）『アラブの歴史 上下』、講談社、一九八三
 V. ラーガヴァン編著（井上貴子他訳）『楽聖たちの肖像』、
 穂高書店、二〇〇一
 井筒俊彦訳『コーラン 上中下』、岩波書店、一九五七
 牧野信也訳『ハディース』イスラーム伝承集成 I-VI』、
 中央公論新社、二〇〇一
 成澤玲子『グリオの音楽と文化』西アフリカの歴史をになう
 楽人たちの世界』、勁草書房、一九九七
 バーナード・ルイス（白須英子訳）『イスラム世界の二千年
 文明の十字路中東全史』 草思社、二〇〇一
 鈴木道子編『民族音楽叢書3 語りと音楽』、東京書籍、一九九〇